水産研究・教育機構 機関リポジトリ
FRA Japan Fisheries Research and Education Agency Institutional Repository

おさかな瓦版　No.10　スケトウダラ

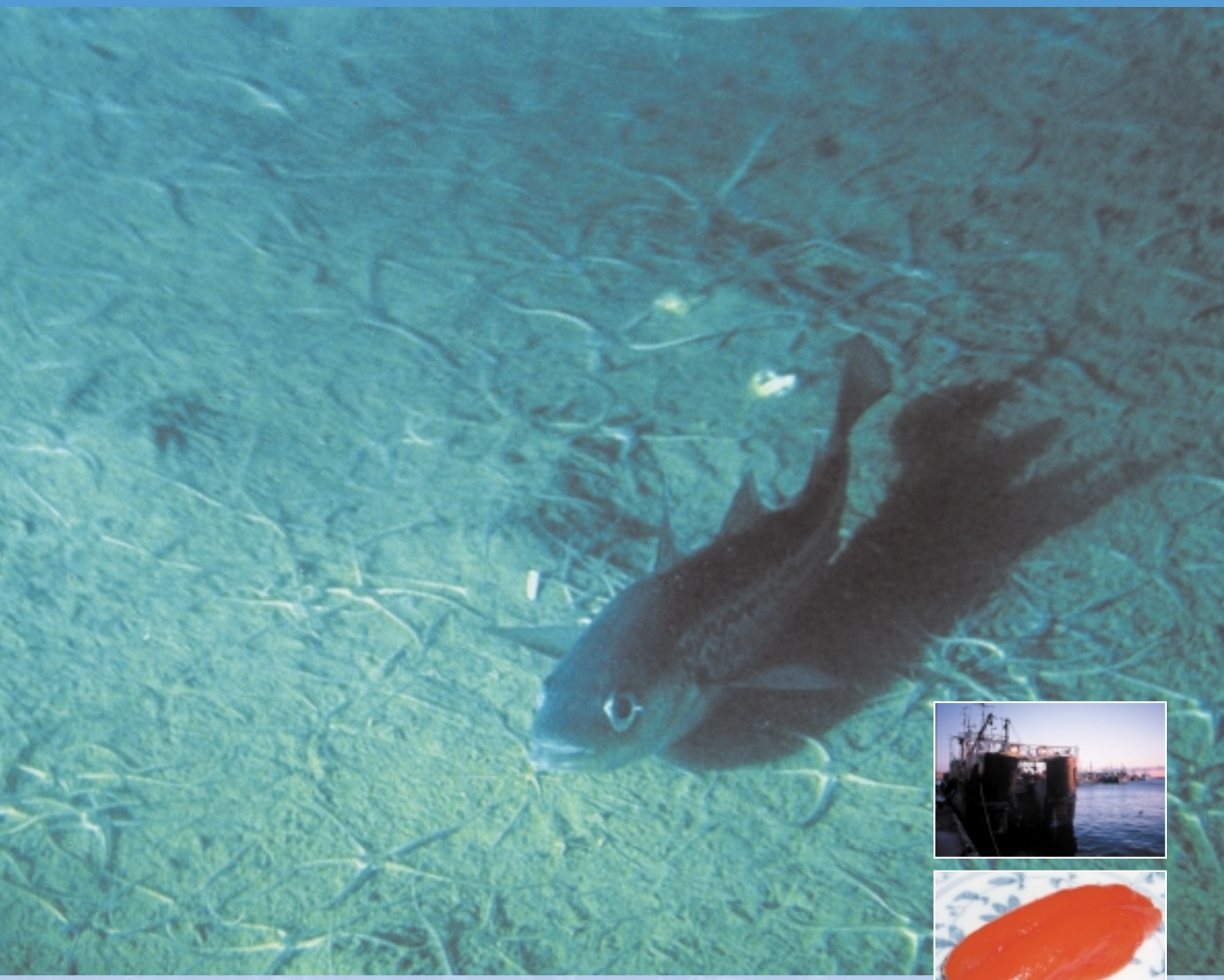
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水産総合研究センター メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2000237

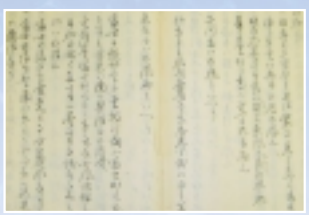
〒220-6115 神奈川県横浜市西区みなとみらい 2-3-3クイーンズタワーB15階 TEL 045-227-2600 http://www.fra.affrc.go.jp/

(独)水産総合研究センターNEWS LETTER

おさかな瓦版

No.10
2006.4





シリーズ：北の海のさかなたち

第2回［スケトウダラ］

シリーズ 第2回「書籍で知る日本の水産」

『何羨録』

－現代に伝わる日本最古の釣りの専門書－

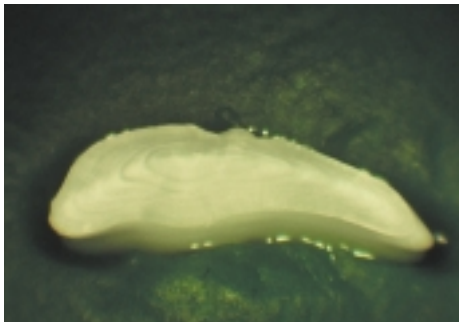
おさかな博士の
「おさかなクイズ」

漁業者とともに小型イセエビの標識放流調査を実施しています

シリーズ：北の海のさかなたち

第2回　スケトウダラ

トロール漁船の漁獲物



スケトウダラの耳石断面

スケトウダラの水揚作業

スケトウダラを獲るトロール漁船

冬のスケトウダラ漁場

おいしそうなタラコは、何の卵でしょうか？答えは、そう「スケトウダラ」です。「スケソウ」という呼び名の方が有名かもしれません。スケトウダラの身は加工されて、魚肉ソーセージやカニかまぼこなど、おなじみのおかずに変身します。最近はスーパーなどで、鮮魚も売られています。白身で淡白なことから、鍋やフライの食材として、結構人気があるようです。スケトウダラは、日本周辺では北側の海でしか獲れませんが、漁獲量も水揚金額もずば抜けて大きく、水産業を支える大きな柱の一つです。

スケトウダラは北海道の周辺に、実に100万トンも分布するとされています。100万トンとは一体どの位の量なのでしょう？大人のゾウは、体重が5トン位あるそうです。「北海道の周りに、ゾウ20万頭に相当する量のスケトウダラが棲んでいる」と言うと、イメージが沸くでしょうか。スケトウダラを獲る漁法は、底びき網（トロール、かけまわし）、刺し網、はえ縄などです。トロール漁船による漁獲量が一番多く、大きな網を使って、一網で最大50トン(ゾウ10頭分)もの魚を獲ることができます。

北海道区水産研究所では、豊富なスケトウダラ資源を上手に利用するための研究を行なっています。スケトウダラの頭の中にある「耳石」という骨の断面には、木の年輪のような輪紋があり、これを数えることで年齢が分かります。魚の年齢を調べることを、「年齢査定」

タラコ（近海もの）

といいます。ほとんどの魚は10歳未満ですが、20歳を超えるものもいます。満5歳の体長40cm位で成熟し（タラコを作りはじめ）、最大で体長70cm位にまでなります。魚の成長は、水温や餌の量によって変化します。そして、年齢を調べることで資源量の変化の中身が分かります。年齢査定は、どの年齢の魚をどの位の量、獲れば持続的に漁獲が可能なのかなど、資源を上手に利用していくために欠かせない作業となっています。

（濱津友紀：北海道区水産研究所）

獲れたてのスケトウダラ

おさかなクイズ？　素朴な疑問シリーズ―6

答えは裏表紙にあるよ！

1 出世魚ってなに？

2 トラウトサーモンって鱒なの鮭なの？

シリーズ 第2回 「書籍で知る日本の水産」

『何羨録（かせんろく）』 ―現代に伝わる日本最古の釣りの専門書―

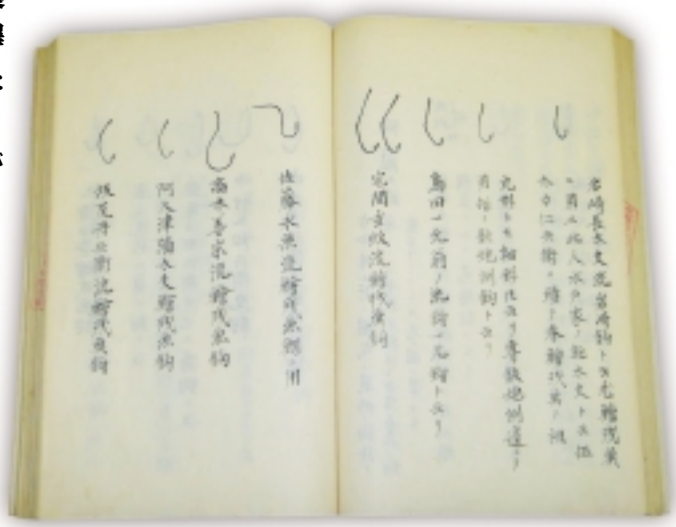
何羨録（かせんろく） 表紙

趣味としての釣りが日本で発展をはじめたのは、江戸時代といわれています。最初は武士の間で、しだいに庶民へと浸透し発展しました。

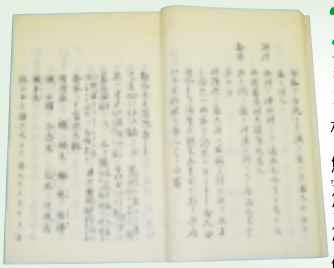
『何羨録（かせんろく）』が書かれたのも江戸時代、享保8年（1723年）でした（注）。陸奥国黒石藩3代藩主津軽采女の作です。采女が江戸湾でのキス釣りなど遊びの釣りについて記したものでした。上中下の3巻で構成されていて、巻之上では江戸湾でのキスの釣り場についてなど、中之巻では釣具や餌について、下之巻では釣期や気象について、記しています。

ところで、『何羨録（かせんろく）』は現代に伝わる日本最古の釣りの専門書といわれていますが、手書きの書物で版本にはなっておらず、現在確認されているものは当館所蔵を含め6冊のみといわれ、全て写本です。当館所蔵のものは、織田完之翁（明治期の農政史学者）から澁澤敬三が譲り受けた織田完之本です。

（鈴木信子・梅沢かがり：中央水産研究所）



（注）…『何羨録（かせんろく）』の成立年は、当館所蔵本に享保八卯年の記載があるため、享保八年（1723年）が通説となっていますが、この年を写本された年とみる説もあります。



釣り場1

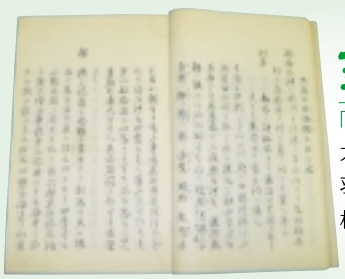
巻之上より（釣り場についての記述）
左より5行目から最終行まで

柾木にて喰(う)魚(の)大概
鯰残魚（きす） 鰈（カレイ） 鰣魚（エソ） 鯒（コチ） 鯵（アヂ） 魴鯡（ホウホ(ホウボウ)）
魷（ウグイ） 小鯛 石首魚（イシモチ） 尨魚（クロタイ） 河豚魚（フグ）
鰷身魚（アイナメ）
鯨も出で潮を吹(く)こと有(り)　すなめりなど云（い）(ふ)

鈎

中之巻（釣り具〔鈎〕についての記述）
右より1行目から5行目まで

岩崎長太夫流　岩崎鈎と云（い）(ふ)尤(も)鱠残魚（きす）に用ゆ　此(の)人　水戸家の能太夫と云（い）(ふ)　伍太力仁兵衛に續て春鱠残魚（はるきす）の祖
丸形とも袖形とも云（い）(へ)り　専(ら)鉄砲洲邊にて用(ゆ)　俗に鉄砲洲鈎と云（い）(へ)り



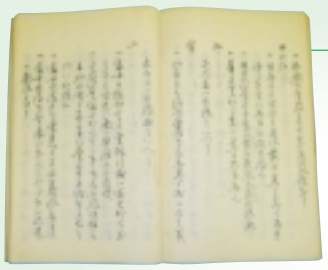
釣り場2

「釣り場1」のつづき　右より1行目から3行目まで

大魚も出 海獺（アシカ）も出るなり
羽根太（はねだ）沖　品川と川崎の間六郷（ろくごう）より左羽根太（はねだ）村の當（あたり）柾木と洲の鼻の間にて巽（たつみ）へ寄る

＜釈文の方法＞

▲基本的に、原文の読みに即していますが、現代人が読みやすいように助詞等は適宜ひらがなに直してあります。
▲（　）の文字は、原文にないが、読みやすく補った文字です。
▲ルビ（カタカナ）→ 原文にあるルビ
▲ルビ（ひらがな）→ 原文にはないが、読みやすく補ったルビ



気　象

下之巻（気象についての記述）（前頁 風候からの続き）
右より2行目から8行目まで

日の入(り)
一　日赤く二間ほど上に紫に黒く赤くすさ
　まじき雲は五日の内大風なり
一　日の入(り)曇(り)たる節は巽（タツミ）か東風か艮（ウシトラ）の風なり
一　夕日に雲かかれば翌日大方雨なり

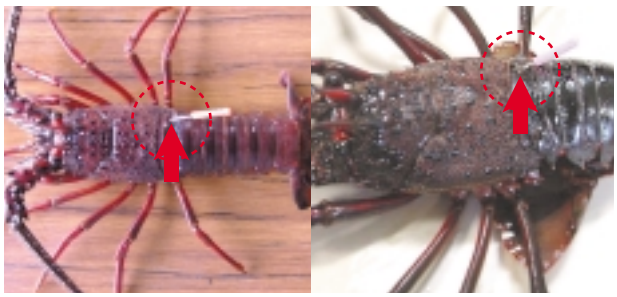
虹
二つ立(つ)は大風といへり

漁業者とともに小型イセエビの標識放流調査を実施しています。

イセエビは茨城県以南の太平洋沿岸の重要な磯根資源です。南伊豆栽培漁業センターでは開所した1989年から、イセエビの種苗生産技術開発と並行して、体長13cm以下のイセエビ（通称：子エビ）の標識放流を行い、移動、成長、漁獲実態を調査してきました。子エビは静岡県漁業調整規則により漁獲規制の対象となっており、再放流が義務づけられています。

2004年からは地元の南伊豆町漁協や漁業者が、再放流の成果を自ら確かめるために標識放流調査の活動を行い、南伊豆栽培漁業センターは静岡県と共同でこの活動に協力しています。2005年は、9月15日のイセエビ漁解禁後に約2,000尾の標識装着と放流の作業を漁業者とともに実施し、その後の標識エビの再捕調査は南伊豆町漁協の全10支所で漁協職員と漁業者が精力的に取り組んでいます。

過去の調査によると、再捕されたエビの80～90%が放流を行った漁協支所の管内で漁獲されており、移動は僅かであることがわかっています。再捕率は、以前、漁協に委託して調査していた時は約4%でしたが、センター職員が調査方法を指導したところ20%以上に向上しました。また、春に放流した子エビ（30～90g）は、その年の秋季には漁獲加入し、翌年の秋には価値の高い中エビ（130～400g）になることが確認されました。これに触発された近隣漁協でも自主的な再放流事業を実施しはじめ、定着しつつあります。



標識装着部位

南伊豆栽培漁業センターでは、南伊豆町漁協イセエビ生産者会議や漁業者の集会で、これらの調査結果の報告を行い、子エビを適地へ再放流することの重要性を説明しています。今後は、最適な放流場所、時期、放流手法を解明し、イセエビ資源の持続的な利用方策を地元に提言していきたいと考えています。

（榮健次：南伊豆栽培漁業センター）

南伊豆町漁協石廊崎支所の漁業者に調査結果の報告を行いました。

イセエビの受け取り現場。ここで銘柄に分けます。

イセエビ刺し網

おさかなクイズ―答え

①出世魚ってなに？

出世魚とは、「人間が出世するように、成長に従って名前が変わる魚」のことで、有名なものとしてはスズキ、ブリ、ボラなどがいます。成長するに従い、それぞれコッパ→セイゴ→フッコ→スズキ、モジャコ→ワカシ→イナダ→ワラサ→ブリ、オボコ→スバシリ→イナ→ボラ→トドなどと名前が変わります。これらの魚は地方によって呼び名が違い、上の例は関東地方での呼び名ですが、関西ではブリはツバス → ハマチ → メジロ → ブリと出世します。地方によって呼び名が違うのに、全国で同じ魚が出世魚になっているのが面白いですね。

トラウトサーモンって鱒なの鮭なの？

トラウトサーモンはサーモントラウトとも呼ばれ、ニジマスを海で養殖したもので、日本には主にチリやノルウェーなどから輸入されています。海で養殖していてもニジマスですから、鱒か鮭かというと鱒になります。ちなみに鮭と鱒は便宜上分けられていますが、両方ともサケ科（Salmonidae）に属しており分類上の差はありません。

モジャコとブリ

表紙写真：海底のスケトウダラ（水深300m）

編集：水産総合研究センター　広報室　発行：(独)水産総合研究センター
〒220-6115　神奈川県横浜市西区みなとみらい2-3-3クイーンズタワーB15階
TEL. 045-227-2600　FAX. 045-227-2700　ホームページアドレス http://www.fra.affrc.go.jp

おさかな瓦版 No.10
平成18年4月発行